

学校名

埼玉県川口市立慈林小学校

校長名 佐藤 元康

所在地

〒334-0071 埼玉県川口市大字安行慈林356

TEL 048-281-2122

FAX 048-281-2794

E-mail 310.37000@city.kawaguchi.lg.jp

URL http://www.sch.kawaguchi.saitama.jp/jirin-e/

1 研究主題

「仲間と力いっぱい運動し健康でたくましい
じりん子の育成」
—自ら課題意識をもち、共に学び合い、
主体的に学ぶ授業の創造—

2 研究の期間

平成26年度～平成28年度 3年間

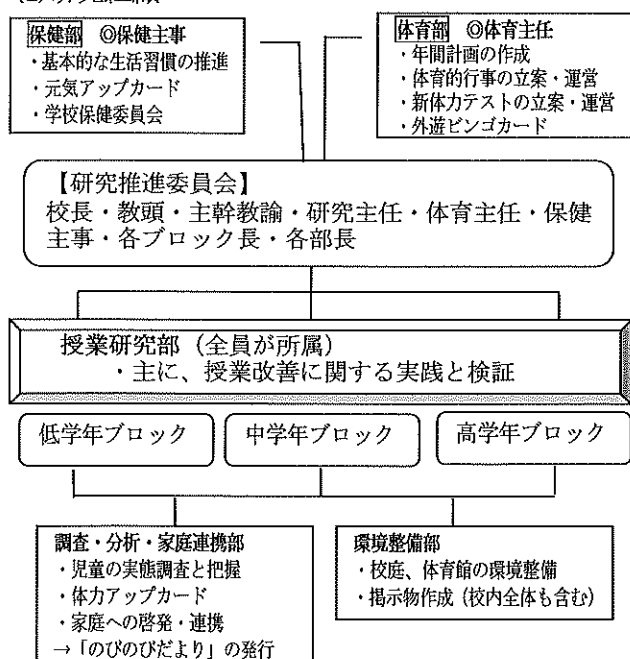
3 研究の目的

研究当初、本校の児童は、「運動が好き」と思っている児童が90%、「週に3日以上、外遊び・運動・スポーツをしている」と回答した児童は81%とやや低いことがわかった。また、昨年度6月に行った新体力テストからも、総合評価A+Bが45%と上位層が少ないことがわかる。このことから、運動をする児童とそうでない児童の体力の二極化に課題がある現状が見えた。

以上の実態から、本研究では、運動好きな児童100%、外遊び100%、新体力テスト総合評価A+B+C95%、A+B75%を目指し研究に取り組んだ。

4 研究の実践内容

(1) 研究組織



(2) 研究仮説

仮説1

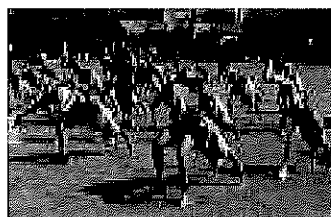
運動の魅力や特性を味わわせることができれば、仲間と力いっぱい運動し、健康でたくましい児童が育つのではないかと。

仮説2

よりよい生活習慣の大切さを認識・理解させれば、仲間と力いっぱい運動し、健康でたくましい児童が育つのではないかと。

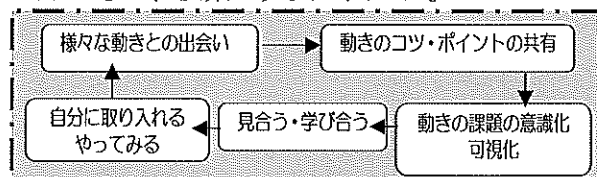
(3) 体育授業の充実～体づくり運動を中心に～
ア 自校体操及び体力アップタイムの実施

本校の課題である投力・柔軟性を中心に、毎時間の体育の授業において「じりん子体操」及び「体力アップタイム」を設定し、各領域・各学年に合わせたプログラムを行った。



イ 単元計画・授業展開の充実

体づくり運動において、1単元、1時間の授業で確実に運動の広がり・運動の質の高まり、体力の高まりが見られるよう以下のような、考え方のもと、授業の充実を図った。



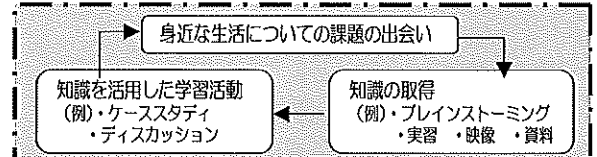
運動の広がり、運動の質・体力の高まり

「自己の動きの気付き」「体力の高まりの実感」「運動の楽しさ」を味わえるよう、明確な指導のポイントや児童同士の見合い・学び合いの時間を設定した。

また、発達段階を考えて「運動の取り上げ方」を作成し、年間指導計画に意図的・計画的に位置づけた。さらに、指導と評価の一体化を図るため、学習カードの統一化を図り、教師も児童もねらいをもって体育授業に臨むようにした。

ウ 保健領域の充実

保健領域において、知識を確実に習得し、身近な生活について課題を解決するために『知識の習得と活用』による授業展開の充実を図った。



ICTの活用や養護教諭との連携を密にして、児童に課題意識をもたせ実践的な理解の充実を図った。

(4) 体育的諸活動の充実

ア 外遊びの奨励と充実

遊びの内容の固定化を防ぎ、多様な遊びに取り組めるようにするために「外遊ビンゴカード」を作成した。個人だけでなく集団で行う遊びも取り入れ、仲間と運動する楽しさを味わわせるように工夫した。また、ビンゴを達成した児童には賞状を授与した。



イ 掲示物の充実

遊具の近くに遊び方や、コツを掲示し、様々な遊びへ意欲的に取り組めるようにし、外遊ビンゴ等の充実を図った。



ウ 全校なわとびの取組

クラス一丸となって、運動に取り組めるよう、集団でおこなう1分間8の字とびの指導を継続的に行った。じりん子ジャンピングオリンピックを年に2回実施し、学年目標記録突破を目指して取り組んだ。その結果、25分休み等に自主的になわとびに取り組む児童が増加した。



エ 体力課題の解決に向けた取組

本校の課題である投力・柔軟性を高めるための各取組を行った。新体力テストの結果をもとに低位の児童を対象とした「投力アップキャンペーン」を実施し、発達段階にあったプログラムを用意した。また、女子プロ野球リーグ「埼玉アストライア」の選手を招いての投力アップの指導も行った。さらに、柔軟性を高めるため、体育朝会及び朝の会を使って、毎日ストレッチに取り組んだ。



(5) 家庭との連携

ア 長期休業期の取組

～体力アップカード+元気アップカード～

本校の課題である「投力」と「柔軟性」の記録向上へ向け、長期休業期を活用して、家庭でもできる「体力アップカード」を作成した。また、基本的な生活習慣を確立するための「元気アップカード」を作成し、家庭と協力して取り組んだ。

イ じりん子のびのびだよりの発行

学校と家庭との架け橋とする「じりん子のびのびだより」を毎月発行して、取り組みの効果向上を図った。また、夏季休業前の個人面談では、体育アンケートの

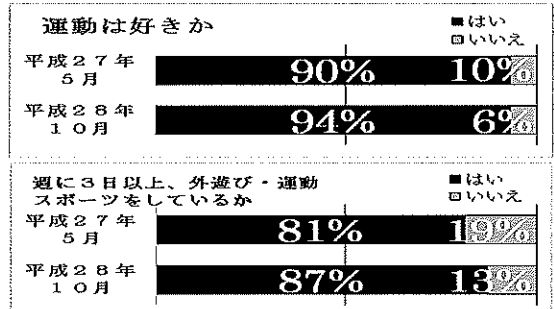


結果をフィードバックし、児童の実態や意識について、一緒に確認をし、協力を仰いだ。

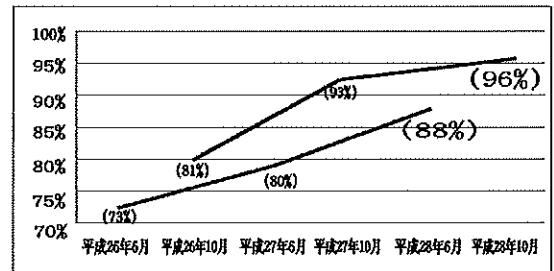
5 研究の成果

(1)毎時間の授業において「体力アップタイム」を設定し、課題解決を図る機会を増やすことで、体力向上の底上げを図った。また、休み時間には、「体力アップキャンペーン」を総合評価C+D+Eの児童を対象を絞って行うことで、総合評価A+B+Cの児童の割合、また、上位層の児童総合評価A+Bの割合も大きく上昇した。

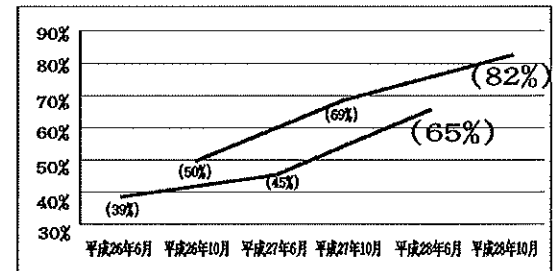
(2)年間の体育的諸行事の充実を図り、運動する機会を多く設定したことや、家庭でも取り組める運動を示し、呼びかけを積極的に行ったことで、外遊び・運動に取り組む児童が増え、運動好きの児童も増えた。



新体力テスト総合評価(A+B+C)の児童の割合



新体力テスト総合評価(A+B)の児童の割合



6 研究の意義、発展性

運動をする児童とそうでない児童の体力の二極化は本校だけでなく、全国的な課題となっている。そのような中で、今回行った本校の取組は、一定の成果を見せた。特に、なわとびや外遊ビンゴ等の諸活動の充実を図ることで、仲間と運動する楽しさを味わいながら、自己の体力向上を図ることができた。今後も、運動する楽しさを味わわせ、運動好きな児童を増やす取組の工夫を、組織的・日常的に行ってきたい。

また、体力の向上と生活習慣は、密接に結びついていることから、今後もより一層、家庭との連携を図っていく。